

第八章 おわりに

ここまで本研究誌をお読みいただき、誠にありがとうございます。

近年は「2024年問題」をはじめとした物流に関する課題が注目を集めてきましたが、気づけばその2024年も過ぎ去り、我々は今「その先の世界」に暮らしています。幸いにして物流の崩壊こそいまだ起きていないものの、いつ起こってもおかしくはありません。働き手の現象、物流件数の増加といった状況は、今なお続いています。

鉄道貨物輸送は、2025年現在も国内でのシェアは数%にとどまり、物流全体で存在感を發揮するには至っていません。この状況は、20世紀半ばから国内の貨物輸送の主役をトラックに譲って以来、変わらぬままです。トラックドライバーの現象といった問題が注目されるに従い、鉄道等を貨物輸送にさらに活用していくモーダルシフトも注目を集めてきましたが、その進みは決して順調とは言えないでしょう。一方で、鉄道貨物輸送にも近年新たな課題が発生しています。特に大きい課題は在来線の廃止でしょう。北海道新幹線の並行在来線をはじめとして、もはや貨物輸送の大動脈でさえも、安泰というわけにはいかなくなっています。鉄道の断絶は、地域住民に影響が及ぶことはもちろん、鉄道貨物輸送に対しても致命的なダメージなのです。物流の問題を解決するだけの力が鉄道にあるのか。今まさに、鉄道貨物輸送のポテンシャルが問われているのではないのでしょうか。

本研究誌では、貨物輸送の事例の研究や他輸送手段との比較を中心に、2025年現在の鉄道貨物輸送の状況を見てきました。また、弊会は2009年度にも鉄道貨物輸送の研究を行っており、今回はその研究からおよそ15年がたった2025年と当時の研究を比較することで、鉄道貨物輸送の将来の「答え合わせ」を行いました。本研究誌は現在地確認的な内容が多く、将来に関するまとまった記述は「貨物の将来像」に記すにとどまっております。鉄道貨物輸送は我々が一般に生活するうえであまり身近なものではなく、また特別深い見識を持つ部員もおらず、研究誌の執筆にあたっては基礎的な学びも多くありました。そのような中で制作された本研究誌は、将来を見据えた推測や提言という側面において必ずしも十分ではないかもしれませんが、しかし、現状を詳細に把握すること、過去との比較をすることによって、将来を考えるヒントとなる事柄は随所に散りばめられているものと思います。本研究誌が、皆様が鉄道貨物輸送の将来について考える一つのきっかけとなれば幸いです。

刻々と変化する情勢の中で、鉄道貨物輸送のあるべき姿も変わり続けていることでしょう。その姿を見極めることは容易ではありませんが、避けることのできない課題でもあります。鉄道貨物輸送を存続することは目的ではなく手段であり、日本の物流を支えること

こそが、鉄道貨物輸送の意義のほうです。物流の転換を余儀なくされている今、鉄道貨物輸送にますますの注目をせずにはられません。

(2年 遠藤)